飛行と〈未来〉の日露戦争

――東海散士『日露戦争羽川六郎』を中心に――

熊谷昭宏

はじめに

日本が日清戦争の結果手に入れた山東半島での権益を失うことになった、いわゆる三国干渉は、「臥薪嘗胆」というスローガンを国民の間に呼び起こした。この後、日本の外交・軍事的関心は急速に「対露」という方向にシフトしていくことになる。またそのような状況下で、諸言説は仮想敵国としてロシアを形作っていき、ロシア皇室内から政治、文化に至るまで、ロシアに関する情報の量は増大した。外交問題の先行き、あるいは海軍を中心とした軍事力の比較をし、日露両国の将来像を描く書物が続々と登場したのもこの時期、つまり明治二九年から日露開戦直前までの約八年間であった。その中には、両国間の関係が戦争という形に発展すると予測（もっとも、最初から開戦が前提となっているものも多い）したものも少なくなかった。日露戦争のシミュレーションは、時に小説という形式をとることもあった。

自由民権運動華やかなりし頃、政治小説で名をはせた東海散士が明治三六年に著した『日露戦争羽川六郎』（明治三六年一一月三日／有朋館／以下、『羽川六郎』）も、そういった〈未来〉の日露戦争を描いた小説の一つである。この小説の最大の特徴は、日本軍の最新兵器として飛行機が登場し、ロシア軍に損害を与えるというエピソードが挿入されるという点である。小説中の〈未来〉の日露戦争、その戦場上空を飛行機が駆け巡る時、夢の乗り物は一体どのような想像力によって描かれるのか。そして、そこにはどのような欲望が込められているのだろうか。本稿では、『羽川六郎』を中心とした数種のテクストの分析から、〈未来〉の戦争を描くことを可能にする想像力とはどのようなものかを考える。またそこから、小説という文

学ジャンルと〈未来〉との関係を考察する足がかりを見出してみたい。

一、日露戦争「未来記」としての『羽川六郎』

明治三七年二月の開戦以前に、日露両国間の将来を軍事的な側面から描いてみせたテクストには、様々なものがある。単行本として刊行されたもののうち、ほんの一例をあげれば、モリス著‐大町桂月訳『東洋之大波乱日露戦争未来記』（明治三一年九月二五日／博文館）、不二山人『壮絶快絶日露戦争未来記』（明治三三年一一月一日／大阪法令館雑誌部）、水上梅彦『日露海軍の将来』（明治三四年六月二八日／警醒社書店）、そして東海散士の『羽川六郎』などである。この中で『日露海軍の将来』は、各種データをもとに日露両国の海軍の力を比較し、結論として日本における海防強化と海軍増強の必要性を説くというものであり、特に物語性は見出せない。そのほかは、いずれも戦争という大きな物語を軸として、日露の〈未来〉を語っていくものである。ここにあげた例でも一部のタイトルに用いられているが、この種のテクストは、日露戦争「未来記」と総称することができる①。

そもそも「未来記」は、作者を聖徳太子に仮託した一種の終末論的テクストであり、そのようなルーツを考慮すれば、決して近代の産物ではない。ただ明治になると、明治二三年の国会開設をにらんだ、末広鉄腸『二十三年未来記』（明治一九年六月三〇日／赤沢政吉）に代表される、政治小説風の二十三年「未来記」が流行する。これらはもちろん国会開設後の日本の政治・社会状況という〈未来〉を語るものであるが、国会が開設される頃にはブームは終わっている。では、三国干渉後の日露戦争「未来記」ブームを形成したテクスト群の中の〈未来〉は、どのように語られるのだろうか。先にあげた「未来記」をみてみたい。まず『東洋之大波乱日露戦争未来記』であるが、ここには物語全体を通して活躍する、具体的に名づけられた人物は登場しない。『壮絶快絶日露戦争未来記』には、ロシア領内で危険を顧みずに諜報活動を行い、軍に情報を提供する桜木大尉が登場する。

『羽川六郎』は一連の「未来記」の中でも、かなり〈現実〉の開戦の日に近いタイミングで刊行されている。タイトルにもなっている羽川六郎は主要な登場人物であり、彼が語る自身の来歴が物語全体の一つの核となっている。しかし、この「未来記」の場合、開戦までの日露両国の外交を中心とした戦争前史の語りが全体の過半数を占めている。例えば目次を眺めると、「遼東還附論」「朝鮮の形勢及日露協商」「北清事件」「英国の威海衛占領」「日英同盟」という章題が並んでいる。このことからも、この小説が三国干渉から日英

同盟締結という、歴史を振り返れば結果的に日露戦争の前史として語ることのできる出来事を、積極的に物語に組み込んでいることがわかるだろう。この日露戦争前史に、主人公羽川六郎の生い立ち、祖父と父親から受け継ぐロシアへの私怨、飛行機発明までの苦難などが重ねられるわけだが、「宣戦の詔勅は発布せられ」ていざ開戦という段階に至るまでに、実に全体の四分の三（本文全四〇五頁中三一〇頁）が費やされるのである。

では、おそらく読者の最大の関心事であったはずの〈未来〉、つまり日露間の戦争状態はどのように描かれるのか。日本は各地でロシア軍の猛攻に苦しみつつも、六郎の諜報活動と彼が発明した新兵器飛行機の効果、さらには金鉱の発見により、旅順や奉天を占領して戦勝国となり、西洋列強の立会いのもと、樺太領有、満州における利権や賠償金の獲得などを講和会議で承認される。そして、朝鮮半島における政治的・経済的影響力を強化する、というのが開戦後の物語の大まかな流れである。さらに六郎に注目すれば、この流れの中に、上条父子によるロシア側への情報提供の発覚（日露戦前から戦中に多く見られるいわゆる「露探」の物語）[2]、飛行機発明の功により受けた「御親電」などのエピソードが差し挟まれている。各種データを引用して戦争前史を語り、ロシアを敵国として意味付ける点では、開戦までの部分は〈未来記〉というよりも、〈現実〉の日露外交史をモデルとした政治小説であるともいえる。そして、開戦前後から戦勝に至る部分は、日本軍の苦戦の度合いや講和の条件等に差異があるものの、『壮絶快絶日露戦争未来記』などの先行する一般的な日露戦争「未来記」と同じ大団円を用意していると見ることができよう。

一方、同じように戦勝を語る「未来記」群の中にあって、『羽川六郎』に特徴的な〈未来〉は、金鉱の発見による戦時財政の維持とロシア海軍の本州攻撃、六郎による飛行機の発明である。日露開戦後の財政は、小説に限らず政府周辺や識者にとっては、かなり早い段階から不安な〈未来〉であった。実際、日本は米英に対する外債の発行によってなんとか戦費を確保している[3]。従って、明治三六年の段階で〈現実〉に横たわる諸問題を踏まえて「未来記」を書こうとすれば、戦費の確保という障害について、何らかの解決＝〈未来〉が与えられなければならなかったわけである。『羽川六郎』では、これを金鉱発見という〈未来〉を語ることで解決しているのだ。ロシア海軍の本州攻撃では、富山・石川の二県が砲撃され、「其損害は死傷者百余名、家屋の焼失千余戸、電信線を切断し鉄道を破壊したる所あり」という被害状況が語られる。これは『日露海軍の将来』等で論じられていた海防問題についての〈未来〉が、本州攻撃という否定的な形で描かれたものであると理解できる。これら二つ

の〈未来〉像については、特徴的とはいえ、他の「未来記」群を含めた日露関係をめぐる同時代の諸言説との関係から、それが何を補完するものであるかを比較的簡単に説明することができる。

ところが、他の一般的な日露戦争「未来記」から類推することが難しいのが、飛行機の発明である。当時ロシアが保有し、実際の戦闘でも使用され日本軍を苦しめた機関銃等の新兵器の脅威を、〈未来〉の戦闘風景の中に描くということは、「未来記」の一つの機能として考えられるだろう。『羽川六郎』でも、「大海戦」の章で、「廿世紀の新発明に係る軍器は、遠慮なく試験を交換せられて、重砲爆裂弾速射砲駆逐艦水雷艇の長処短処は、常に研究精査せられたる策戦計画によりて、遺憾なく使用応答せられたり」と、新兵器の実戦での登場が語られる。ところが、飛行機に関していえば、動力付飛行機の実用化は『羽川六郎』刊行時にはまだ夢の話なのである。④『羽川六郎』において、日本の勝利に終わるまでの戦争を語る物語の大きな枠組み自体は、開戦か非戦か、陸戦か海戦か、勝利か敗北か、といった当時想定可能だったいくつかの〈未来〉像の組み合わせの一つである。確かに夢の兵器を描くことも一つの〈未来〉像を提示することになるだろうが、六郎が中心となる飛行機発明の物語には、日露戦争「未来記」が果たす、もう少し別の機能が隠されていると考えられる。

二、日露戦争と飛行の想像力

予備門から大学に進学した六郎は病気のために中退するが、「幼より数学を好み、機械学を研究するの意切」であり、英国留学を果たして研究を続ける。その後、一度は飛行実験に失敗するも、開戦後に成功し、その発明品で大きな戦功をあげる。

人間が空を飛ぶというモチーフ自体は同時代文学において特に新鮮なものではなく、ジュール・ヴェルヌの空想小説の翻訳等でお馴染みのパターンだったはずである。⑤翻訳以外でも、飛行船の登場する押川春浪『日欧競争空中大飛行艇』（世界怪奇譚第三編／明治三五年三月二三日／大学館）や、飛行機ならぬ「飛行器」発明の物語である江見水蔭『空中飛行器』前後編（前編…明治三五年二月八日、後編…明治三五年三月二五日／青木嵩山堂）などが『羽川六郎』に先行して世に出ている。また、萩園（渡辺霞亭）「日露戦争」（「大阪朝日新聞」／明治三七年一月一日～二月一一日）も、主人公が世界に先駆けて発明した飛行船で、⑥戦地上空を駆け巡るというものである。『羽川六郎』における飛行機発明のエピソードは、これらの飛行機物語群とどのような関係を結んでいるのだろうか。

まず、六郎の発明した飛行機がどのように描かれているかを見てみたい。最初の飛行実験に失敗した六郎は、開戦後に「一種の元動

力を発明し」て自信を強め、遂に「〇〇〇殿下を始め奉り、陸海軍の将校、政府要路の高官等三十余人」の見守る秘密の実験で、大成功を収める。その様子は、「予」＝六郎自身によって次のように語られる。

徐に身を機器に投じて、元動力を発動せしめ、一人にて徐々に上昇し、凡そ五分間にして高さ三百米突に達したり。即ち此に其上騰を止め、それより西北に進行を始めたり。時に北風最も強かりしが、我が飛行機は、これに逆ふて更に障碍せらるゝこともなく駛走せり。

この時六郎は、地上の目標物に空き瓶を投下して命中させるという実験も成功させている。このような実験が語られると、読者としては飛行機の外観や構造についての情報を期待するだろう。ところが、この羽川式飛行機そのものの描写は、余りにも少ないのである。読者に与えられた機体に関する唯一の情報は、「厳重の秘密を保つべき」とされた実験の成功をすっぱ抜いた「上海の一外字新聞」の記事の引用という形で、次のように示される。

羽川某の発明せしといふ空中飛行機否飛行翼は、電気より生ずる一種の尖熱と重力との関係を利用し、一種の金属に軽気を充たし、恰も衣服の如く身躰に密着せしめ、鳥翼の如き薄き器械あり、両足にて連続したる活車を踏み、遅速上下の運動を補助するもの、如し。

簡略に概要が示されてはいるが、この後飛行時の描写で「衣服の如く身躰に密着」した機体や、「両足にて連続したる活車を踏」むような操縦の様子は示されることはない。実験成功に至るまでの過程にしても、「一意或機器の創造に従事し」「多年研究せる或機械の創造も、漸く成功の緒を得て」といった説明がなされるのみである。第一回目の実験が失敗した原因についても、ただ「不完全なる材料の結果は、機関要部の破綻を生じ」としか語られていない。この飛行機自体に関する情報量の決定的な少なさは、同じように主人公による「飛行器」発明を物語の軸とした『空中飛行器』でも指摘することができる。[7] 明確な輪郭を与えられる〈未来〉の戦争の物語の中にあって、飛行機はかなり曖昧な〈未来〉として提示されているのだ。

では、やや曖昧な〈未来〉として示されながら、飛行機は何をもたらしたのか。飛行機に乗り込むことで人類が手に入れることになる、上空から地上へと向かうまなざしの描かれ方を手がかりに考えてみたい。例えば、六郎が始めて実際の戦闘で飛行機を用いて旅順のロシア軍を攻撃する場面は、次のように語られている。

昇ること凡そ三百米突、金州半島は眼下に在り。（略）旅順に向ひたるに、此時は我軍及び敵軍には、飛行機の飛行を認めた

る者ありしが如く、各所に群集して頻りに仰視せり。（略）先づ砲台を破らんと欲し、試みに左方の中央に一箇の爆裂弾を投下したり、如何なる所にや抵触しけん、双眼鏡を把りて下瞰するの遑なく、塵煙砲台を包みて軈て爆然電の如き響きを聞けり。（略）本営の四辺は、騎馬の出入絡繹として絶えざること、宛然蟻の行列を見るが如くなりき。

先に指摘しておいたように、機体や操縦風景についての描写は殆ど見られない。俯瞰のまなざしについては、「金州半島は眼下に在り」「宛然蟻の行列を見るが如くなりき」というように表現されている。

ただ、このまなざしがほとんど地上に対してのみ向けられたものであることには注意しなければならない。六郎は慌てふためく「蟻の行列」のようなロシア兵たちの様子は語っているが、水平線や眼前の雲の様子には全く言及せず、それらはまるで眼中にないかのようである。もちろん、これは明治三六年一二月当時、飛行機に乗って大海原の上空で水平線を眺めたり、雲の中を突っ切るという状況を経験する人間が存在せず、正確な描写が不可能であったという事実が、大きな原因の一つとしてあげられるだろう。しかし、たとえ不正確であっても、そのような光景が想像され、なんらかの形で描かれてもよかったはずである。実際、六郎は旅順上空に至るまで「西行すること半時間」というフライトを行っているが、その間、わずかに眼下に「金州半島」の存在を認めたことを語るのみである。ここで欲望という言葉を用いるならば、六郎の欲望は、自身の乗り込んだ飛行機によって地上に様々な変化を与えること、それからその変化を語ることに向けられていたということになるだろう。そして戦争を描いた『羽川六郎』の場合、その地上の変化は、戦果、それも〈未来〉の戦果と言い換えることができる。兵器の動力やデザインはともかく、空から攻撃することによって得られる〈未来〉の戦果が、新たに欲望されつつあったわけである。

強国ロシアと戦う〈未来〉の戦争を想像する力は、それまでは単に地図上のシミュレーションやロープで繋いだ偵察用の気球[8]がかろうじて可能にしていた、敵を見下ろすまなざしを、小説において、しかも自由自在なものとして描き出した。『羽川六郎』には、序文に続く形で「東亜略図」と題された地図が添付されている。この地図は、日本を含めた東アジアと当時のロシア領との位置関係を把握するための資料として小説に添えられたものであると考えられる。六郎のフライトはまさに、そこに描かれたうちの旅順周辺の「地」と「図」をより等倍に近い形で眼下にとらえる行為である。また、空からの爆撃は、微分化された地図上にしるしづけをすることと等価であろう。〈未来〉の戦果を想像する欲望は、世界を眼下の生き

た地図として出現させる語りをも可能にした[9]のだといえる。そして、その俯瞰のまなざしに基く欲望は、英雄の神がかり的な勇猛さではなく、知略にたけた指揮官の戦略でもなく、不遇の一青年が独自の研究の結果発明した機械が可能にする。機械の発明というモチーフが、戦争の〈未来〉を語る際の重要な要素となったということも、見逃してはいけないだろう。

三、戦争と発明と〈未来〉と

『羽川六郎』は、六郎に焦点化して読むならば、不遇な少年時代を過ごした彼が、宿願であった飛行機発明を成し遂げ、その発明品を用いた目覚しい戦功によって「御親電」を受ける程の名声を得る、一種の立身出世譚、あるいは成功譚という側面があることを指摘できる。この場合、立身出世の鍵となるのが、飛行機の発明であることは言うまでもない。小説において、発明が立身出世を保証するのはどのような場合か。六郎が飛行機発明に従事する動機は、当初はそれほど明確に語られていない。ところが、「北清事件」従軍を境に、「予が従来研究したる飛行機を造り、之を以て通信に用ひんと」考えるようになるのである。その後、〈未来〉の日露戦争で、たった一機の飛行機が日本を勝利に導くことになるということは、これまでにみてきた通りである。羽川六郎という青年は、発明によって国家間の戦争に参入し、発明によって人生の成功を手にする[10]。『羽川六郎』は、戦争・発明・〈未来〉という要素が緊密に絡み合った小説なのである。

ところが、小説における戦争・発明・〈未来〉の関係は、瞬時にしてその在り方を変化させるものでもある。先にあげた日露戦争「未来記」群の中で、おそらく最も現実の開戦に近い時期に発表されたのが、萩園（渡辺霞亭）の「日露戦争」であろう。何しろ「大阪朝日新聞」へ連載している最中に戦争が勃発してしまったのであるから、ある意味ではこれほどタイムリーな際物はないといえる。ただ、この「日露戦争」は開戦直後に連載が中止されてしまったため、最も発表のタイミングが悪かった「未来記」でもある。明治三七年二月一三日の「大阪朝日新聞」には、次のような文章が掲載されている。

> 非常の喝采をもつて読者の歓迎を受けたる小説『日露戦争』は、局面錯綜今や佳境に入らんとするに際し、愈実際の戦争開始せられ、然もその戦況は小説よりも壮大猛烈の状を呈し来りたれば未来記小説を掲載する必要なしと認めたるに付き、遺憾ながら一先づ掲載を中止する事となしぬ、愛読諸君幸に諒とせよ

「日露戦争」ではこの直前まで、主人公が自ら発明した飛行船に搭乗して戦場上空を航行し、一人の娘をめぐって「露探」集団と対

決するというストーリーが展開されていた。しかし、「未来記小説を掲載する必要なし」という理由から、飛行船と共に語られた〈未来〉はあっけなく消し去られてしまったのである。右の告知文では、「実際の戦争」の「壮大猛烈な戦況」が「未来記小説」と対置されている。そして、「未来記小説」には突然「必要なし」という位置づけがなされる。ここにおいて、遂に〈現実〉が〈未来〉よりも力をもつことになったのである。それでは、〈現実〉と〈未来〉の力関係が変化した後、「未来記」に代ってどのようなものが「必要」とされることになるのか。「日露戦争」連載中止が告知された日から四日後、同じ「大阪朝日新聞」には「日露海戦第一記」「仁川海戦画報（一）」という記事が掲載されている。[11] つまり、「未来記」と入れ替わりで登場するのが、戦争の「実記」類なのである。[12]「日露海戦第一記」の冒頭には、序文とみられる文章が付されており、その末尾には、

　此第一幕の如何に華やかに又如何に勇ましく開演せられたるかを読者に紹介し得るは予の畢生の幸福とする所なり

とある。「未来記」を排し、新たに実戦のありさまを「読者に紹介」する「実記」にスペースを与える「大阪朝日新聞」の姿勢からは、〈いま、そこ〉で起きている出来事を、いかにして〈現実〉として提示するかということが重要となったことがわかる。それは、裏を返せば、読者の求めるものが、そのような〈現実〉の提示へと変化したことにもなる。過去の日露関係を踏まえ、さらに末尾に日露それぞれの戦艦の保有数をあげて両国海軍の戦力比較を試みる表[13]まで織り込んだ『羽川六郎』だが、もしも「日露戦争」と同時期に刊行されていたら、同様に「必要なし」という烙印を押されていたことだろう。

　ここで思い出されるのが、国会開設前の二三年「未来記」の流行期に坪内逍遙が行った「未来記」批判である。逍遙は「未来記」とその作者に対して、

　漠たる一般の社会の前途は或は学理をもて推知するを得べし只夫特別なる社会の前途は殊に霊妙なる人情の進化は哲学も未だ極め得ざる所なり知らず我国の未来記作者は何等の神秘なる能力ありて是等の妙智識を得たりけるぞ[14]

という疑義を呈している。この批判は直接的には戦争「未来記」に向けられたものではない。だが、同じ文章中では「直接の観察」ということが重要視されている。この点に注目すれば、逍遙の「未来記」批判は、「壮大猛烈の状を呈し」つつある〈現実〉の戦争を前にして、「実記」を重要視していく新聞の編集方針と重なる部分を有することがわかる。このような「観察」重視の雰囲気の中でも、戦争を描く小説は、軍事小説として〈現実〉の日露戦争下を生き続

けることになる。[15] しかしこれら軍事小説は、〈未来〉を語る役割を担っていない。それらは、戦前という想像された場を埋めた戦時において、〈現実〉に推移する戦争を語る種々の「実記」を参照枠として読まれることになるのだ。〈現実〉に遭遇した日露戦争「未来記」の在り方は、以上のようなものであったが、このことから、「未来記」が何ら力を持たないという結論を導くのは早計である。前章で確認したように、『羽川六郎』は〈未来〉の戦果に対する欲望を満たしていることを忘れてはならない。そして、何より、〈未来〉の戦勝を用意しているのである。刊行前に「東京朝日新聞」に掲載された『羽川六郎』の広告に付された文章は、次のようなものである。

日露の関係は我神州未曾有の国難なり。今は実に憂然一声砲火将に爆発せんとするの瞬間に在り。海戦は如何、陸戦は如何、露国及列強の情勢は如何。抑勝敗の結は果して如何此書は小説にして小説にあらず。実伝にして実伝にあらず。東海散士が縦横なる文藻を確実なる事実に寓し平易に明暢に此問題を解決して、我国民諸君の一粲を博せんとするもの也[16]

見方を変えれば、『羽川六郎』に代表される日露戦争「未来記」が〈未来〉の戦争を語ることで、読者自身が「砲火将に爆発せんとする」戦前という場にいることを想像することにもなるだろう。日露戦争「未来記」は諸々の言説と関係を結ぶことにより、ロシアとの〈未来〉の戦争が想像可能な、戦前という地点を出現させる力を持っていたわけである。

そのような戦争「未来記」の機能を考慮するならば、発明というモチーフは、単に登場人物の立身出世の条件であるということにとどまらない。発明は、劇的な〈未来〉をもたらすものである。それが戦争と共に語られるならば、戦争という劇的な状況下で劇的な〈未来〉が訪れるという物語が成立する。その時戦前は、劇的な変化が想像される地点として、読者の内面に出現するだろう。『羽川六郎』はそのような機能を持つ「未来記」の代表的なものだといえる。発明による劇的な〈未来〉の想像は、開戦に至って逍遙流の「観察」が重要視されて力を失うが、それは同時に戦争の強固な〈現実〉が代わって作動し始めることを意味する。そして、読者の欲望は戦争「実記」に受け継がれるのである。

おわりに

以上、東海散士の『羽川六郎』を中心に、日露戦争「未来記」群が果たす機能を考察し、日露戦争「未来記」が〈未来〉の戦争を描くことで、戦前という読者の位置を出現させるという結論に至った。また、発明のモチーフは戦争を劇的な〈未来〉を用意するものとし

て描くことを可能にすることも指摘した。そのような発明の中でも、六郎の手による飛行機は、空爆などによる劇的な〈未来〉の戦果と、空中からのまなざしに対する地上という新たな世界像を想像可能にするものであった。

日本で初めて飛行機が空を飛んだのは、『羽川六郎』刊行から七年後の一九一〇年一二月のことである。[17] 六郎の発明は、七年をかけてようやく〈現実〉にその座を譲ったわけである。そして日露開戦の十年後には、山中峰太郎という人物によって『現代空中戦』（一九一四年一〇月一八日／金尾文淵堂）という書物が著される。この書は、既に〈現実〉のものとなっていた飛行機を、兵器として使用する際の可能性を検討するものである。目次には、「戦場に於ける飛行機偵察」「爆弾投下の効果」といった見出しが並んでいる。そして何より、この年、飛行機による爆撃・偵察、さらには六郎も想像し得なかった飛行機同士の空中戦までが、ヨーロッパの空で繰り広げられることになったのである。実際、『現代空中戦』も、日露開戦の十年後に〈現実〉化した空中からの攻撃の衝撃を背景に書かれている。

東海散士は、的確に空中戦時代を予測していたわけではないだろう。また、仮にそうであったとしても、〈現実〉の予測が『羽川六郎』の重要な機能ではない。問題は、ヨーロッパで空中戦が繰り広げられていたその時、どのようなテクストによって、どのような新しい戦前が見出され、どのような欲望が生まれつつあったかということであろう。[18] またそのような視座に立つ時、羽川六郎の空飛ぶ発明品の意味が再検討される必要があるだろう。

注

① 日露戦争「未来記」に関しては既に、杉山欣也「夢みられた日露戦争、あるいは博文館の夢見た未来」（筑波大学近代文学研究会編『明治期雑誌メディアにみる〈文学〉』／平成一二年六月三〇日／筑波大学近代文学研究会）などの先行研究がある。杉山は『東洋之大波乱』日露戦争未来記』などの日露戦争「未来記」の問題を、博文館の出版戦略と結びつけて考察している。

② 「露探」は日露戦争前や戦中に小説に好んで取り上げられた。例えば本稿で言及する江見水蔭『空中飛行器』では、「露探」の嫌疑をかけられた軍人が登場する。また日露開戦後にも、山岸荷葉「露探芸者」（「文芸界」第三巻第七号／明治三七年六月一日）などの「露探」物とでもいうべき小説が登場している。

③ このあたりのいきさつは、古屋哲夫『日露戦争』（中公新書一一〇／昭和四一年八月二五日）などに詳しい。

④ ライト兄弟がフライヤー号で動力機による人類初飛行に成功するのは、一九〇三（明治三六）年一二月一七日のことである。

⑤ 例えば、ジュールスベルネ著、井上勤訳『月世界一周』（明治一六年七月二八日／博聞社）など。

⑥ 飛行船自体は一九〇〇年（明治三三）前後に世界各地で相次いで試作

品が製造されているので、厳密には〈未来〉の乗り物ではない。しかし、この時点で長時間の安定飛行が可能なものはなかった。もちろん、日本での成功例もこの時点ではない。

⑦　主人公春野鶴夫とその弟雪人が、前編で、発明のヒントとなった「西洋の古新聞」に掲載された「鳥形の空中飛行器」に言及しているが、その後「飛行器」の外観についての描写は全くなされない。後編末尾で飛行の成功が語られるが、結局、「製造の方法、機械の組立の如きは、素より大秘密であつて、人に示すべき限りではあらぬ」ということになる。

⑧　日露戦争では気球での偵察が行われたが、使用されたのはロープで繋ぎ止める係留気球であった。大本営写真班撮影『日露戦役写真帖』第七巻（明治三八年三月一〇日／小川一真出版部）には、日本軍が用いた気球の写真（「周家屯附近ニ於ケル我軽気球ノ昇騰」）が収められている。

⑨　小説と添付された地図との関係については、勝又正直が「地図上の主体―田山花袋作『田舎教師』を読む―」（「社会学評論」第四九巻第一号／平成一〇年六月三一日）で、同時代の地理教育などの状況から論じている。

⑩　発明によって成功する人物が登場する小説には、ほかに村井弦斎『日の出島』（明治三〇年五月六日～明治三五年一〇月四日／春陽堂／全一〇冊）などがある。

⑪　「大阪朝日新聞」（明治三七年二月一七日）

⑫　もちろん、博文館が開戦後程なく創刊した「日露戦争実記」（一九〇四年二月二〇日に第一編発行）や「日露戦争写真画報」（明治三七年四月八日に第一巻発行）などの諸雑誌もこういった流れに沿ったものであると理解できる。

⑬　この表には日露両国の「戦艦」「装甲巡洋艦」「巡洋艦」「海防艦及砲艦」「駆逐艦」「装甲海防艦」「水雷艇」について保有数や排水量、速力等が示されている。

⑭　逍遙遊人「未来記に類する小説（第一）」（「読売新聞」／明治二〇年六月一四日）

⑮　例えば、江見水蔭『軍事小説武装の巻』（明治三七年五月一一日／博文館）など多数。

⑯　『日露戦争羽川六郎』広告（「東京朝日新聞」／一九〇三年一一月七日）

⑰　国内外の航空史については、斎藤茂太『飛行機とともに―羽ばたき機からSSTまで―』（中公新書三〇一／昭和四七年一〇月二五日／中央公論社）や、鈴木真二『飛行機物語―羽ばたき機からジェット旅客機まで―』（中公新書一六九四／平成一五年四月二五日／中央公論社）などを参照した。

⑱　当然、日露戦争後から昭和初期にかけて登場する、ホーマー・リー著‐池享吉訳『日米戦争』（明治四四年一〇月二八日／博文館）などの日米戦争「未来記」群について考察していく必要がある。

〔付記〕

文章の引用などについては、ルビ・傍線等を省略した。また、旧漢字は原則として新漢字に改めた。